

「日焼けして楽しかった」

鹿児島 僧侶ら中心となり福島の子どもも招く



放射能汚染の影響を受ける福島県の子どもに、心身の健康を取り戻してもらおうと、鹿児島教区内の僧侶有志で組織する「こころのふるさと交流『福島の子どもたち』ホームステイ実行委員会」（三島慶昭代表、鹿児島県鹿屋市・大円寺住職）は8月17日から7日（38）由佳さん（中1）間、18人（保護者3人含む）を招いた。

18人は県内の寺院や

門信徒宅8軒でホームステイ。海水浴や砂風呂、陶芸体験、バーベキューなどで思い切り楽しんだ（写真）。

福島市の唯木誠君（小5）は「みんな放射能が怖くて外で遊ばない。日焼けして楽しかった」と笑っていた。

同市の三澤綾子さんは

寺で過ごせるので朝早く起きてお参りした。お寺の保育園でお手伝いさせていただき楽しかった。また来たい、綾子さんは「滞在中、ずっと仏さまに守ってもらえているようで安心だった。うつむき気味だった気持ちが前向きになり生きる活力をいただいた。福島のお母さんはピリピリしている人が多く、心のケアが必要。私のような思いを一人でも多くの母親に味わってもらいたい」と話した。

また、二本松市の齋藤敬子さん（33）は4歳の結理花ちゃんと参加。津波の被害や放射能汚染の現状をホストファミリーの住職らに話し、結理花ちゃんが久しぶりの砂遊びを楽しむ姿に目を細めていた。

実施にあたり、同委員会は教区内の教化団体などに協力を呼びかけたところ、教区をはじめ、少年連盟、仏壮連盟、仏婦連盟、仏青

連盟などが支援に賛同し、教区を挙げての事業となった。受け入れ寺院となったある住職は「子どもにいい職は「子どもにいい」と呼ばれること、ちゃんと呼ばれることがだんだんうれしくなった。この事業は本日も協賛してもらい、九州拳挙げての事業にしていきたい」と語る。

三島代表は「放射能汚染は10年、20年で解決する問題ではない。今後も支援態勢を整えて継続的に行いたい。今後は支援活動の輪を広げ九州各地の寺院にも協賛してもらい、九州拳挙げての事業にしていきたい」と語る。

また、二本松市の齋藤敬子さん（33）は4歳の結理花ちゃんと参加。津波の被害や放射能汚染の現状をホストファミリーの住職らに話し、結理花ちゃんが久しぶりの砂遊びを楽しむ姿に目を細めていた。